

# ウメちゃんのおじいさんの

## 辞世歌

今坂柳二

昔ばなしって面白いもんですね。一つの話が終わったと思えば、もう次の話がどこかで始まっているんです。まるで土の中で生まれた幼虫みてえにですよ。このお話をしてくれたのは俳句仲間のウメちゃんだけど、もう次のお話がどこかで始まっているんだ。こうしての間にも次の話がチーチーボみてえに出番を待っているにちげえねえだよ。

さてさて、今日の話は耳から這入ってきたんじゃない。ある人が一生を振り返って、残った家族たちに思いをのべたお別れの葉に向かつて、「そんなの昔ばなしじゃねえでや」って言われるのも承知のうえでのお話であります。

富士山や 宿屋の山を振り返えり

拝みながらに 我は逝くなり

ここでいう富士山は、子供の頃から慣れ親しんだ山についての感懐なんですね。二つの山の違和感があります。作者の少年・壮年の差を示す違和感もあり、時代に負わされた避けがたい津波にも似た感じを言外に示そうとしている訳でしょう。

君が代は千代に八千代に思ひつつ

七十八まで長く生きのび

「君が代」に「七十八歳」という「長命」。更に重ねられた「ご年令を思うなり」、「長く生きのびた」ことを自祝する言葉が次ぎ次ぎと湧くがごとく生まれるのも当然です。句集にする歌集にしる、この祝寿を力に替えて、歌本来の力を加えられますことを・・・。

喜助さん 倉さん百さん佐喜さん

兄 傳さんも 我を待つらん

ほんとは右のような人生に、家族力を合わせて渡り越えた生業の歌について聞いて欲しかったんです。実は私も農業に就いて三十年ほど小規模ながら養豚や酪農に携わっていました。感想文を書きながら、春浅い野の光り、豚たちの鼻息きや毛艶をふっと思いついていました。南無、毛物と呼ばれた鉄足の神たちよ。

いまさか りゅうじ

狭山市笹井在住。二十四歳から俳句に関わって、現在同人誌「つばさ」代表。かたわら、昔ばなしの採集・採話を続け、「龍じいの昔ばなし」以下十冊発行。

### 編集後記

酷暑となった今年の夏、体育系と違い文化系サークルの私には、冷房の効いた部屋なので助かる。芸術祭も実行委員会が立上がり「世代を超えて」や、印刷チームも、暑い中、会議が行われています。早目の準備が成功の鍵ですね。

(高沢正夫)